

平成21年度 水産試験場組織目標の評価

平成22年3月末現在

組 織 目 標	指 標 名	21年度目標値	評 価	達成率(%)	達成度	今後の対応
琵琶湖水産資源の回復	資源回復と漁場の改善					
	農業排水影響評価、漁網汚損状況の把握と汚損原因の解明、南湖水草帯での貧酸素状況の把握	3件	宇曾川の河口付近で農業濁水の拡散状況を4月下旬から6月中旬まで調査した。濁水は岸から沖合100m付近まで達することが多く、沖合700mまで達していたのは一日だけであった。 エリ網の汚損状況を把握するため、5～3月に琵琶湖の7ヶ所に試験網を設置した。網上の付着物量は秋から冬に最大となり、大浦湾から北湖西岸部で多い傾向が見られた。水草の異常繁茂した志那地先で溶存酸素量を観測した。8月調査では表層の溶存酸素が夜間でも過飽和状態が維持されることが多かったのに対して湖底直上では10%以下の酸素飽和度が多く観測された。	80%		漁場環境の保全状況把握のため、農業濁水のモニタリングは継続する。 漁網の汚損調査は規模を拡大し、汚損原因の究明と対策の検討に重点を置いて実施する。 水草については琵琶湖博物館との連携を図り、水産試験場では魚介類を活用した繁茂抑制技術の開発等に重点を置いて実施する。
	外来魚のより効果的な親魚捕獲技術開発、蝸集駆除技術開発	2件	カイト式オッタートロール網を試作し、従来からの4mビームトロール網よりもオクチバスの捕獲効率が高いことを確認した。外来魚の蝸集場所である彦根旧港湾において電気ショッカーボートにより駆除調査を行い、データを解析中である。	75%		カイト式オッタートロール網については、カイト式オッターの強度を向上させ、連結するトロール網の大型化と水草混入対策を行う等の改良を重ねる。そのことで琵琶湖南湖において駆除が進んでいないサイズの外来魚を補充する捕獲技術として完成させる。
	種苗生産放流技術、繁殖・育苗場造成技術の改良・開発	2件	水田を利用したニゴロブナの効率的養成技術を検討し、田植え後の水田にふ化仔魚を放養すると密度が低いほど成長がよく、4万尾/反の放養で十分に育ち、既存施設で養成するよりも安価であることを確認した。セタシジミ種苗はアップウエリング方式が25日間生残率が26.4%と高く、給餌の併用で1ヶ月で0.36mmまで育った。	90%		水田を利用したニゴロブナの効率的養成技術の確立を図るとともに、ホンモロコ、ゲンゴロウブナについても養成技術の開発を進める。セタシジミについては、給餌飼育を併用することによる稚貝の大量生産に向けた技術開発を進める。
	冷水病に強いアユの養成技術、ピワマス3倍体量産養殖化技術と飼育特性の解明	2件	アユの冷水病の特異免疫の獲得能はヒウオと呼ばれる鱗のないアユでは獲得しないが、1g程度の稚アユとなってからはアユの大きさに対応して獲得されやすくなることを明らかにした。 養殖ピワマスから事業規模で作出した三倍体魚の倍化率が57～83%と安定しないことから、受精卵の最適処理条件について検討するとともに、三倍体魚の実用化に向け、成長や成熟など飼育特性の情報収集を行った。	80%		これまでに開発した「冷水病抗病性付与技術」の養殖業者の活用実態を調査して、抗病性付与状況を評価する。ピワマスについては全雌三倍体作出のための処理条件をさらに検討する。
水温上昇がアユ・ホンモロコ・イサザ・ピワマス・セタシジミに及ぼす影響評価	5件	アユについては産卵時の高水温の影響を調べ、25℃以上で産卵に影響がでることが分かった。ホンモロコについては琵琶湖（大津市小野、湖北町海老江）と伊庭内湖で産卵状況と水温の関係を調査した。イサザについては生息分布調査を8月から実施するとともに、過去のデータから漁獲量と水温やDOとの関係を検討し、春季の水温、餌料量および底層DOが漁獲量と相関していることが分かった。セタシジミについては漁場近辺の水温観測から産卵期から盛夏にかけて内部波の影響と見られる激しい水温変動（11～28℃）を水深10～20m層で観測した他、D型仔貝の水温別生残試験の結果、泥地では28℃で生残率が低下した。	80%		イサザ資源の温暖化による影響については、より緻密な評価を進めるとともに、その評価結果に対応した資源安定化技術の開発を進める。セタシジミについては、生息漁場の水温把握や、肥満度を指標とした水域間比較等による良好な生息環境を検討する。	